

中央教育審議会大学分科会
大学院部会(第71回)



一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

資料4-1

中央教育審議会大学分科会
大学院部会(第71回)
H26.12.9

社会科学系大学院教育 その在り方と改革の方向性について

一橋大学前理事・教育・学生担当前副学長
落合一泰

2014年12月9日

21世紀グローバル・チャレンジの時代の大学院教育

21世紀グローバル社会が直面するのは、グローバル・チャレンジ、グランド・チャレンジと呼ばれる人類社会共通の諸課題:

医療 食料と水 エネルギー 環境 人口激増と少子高齢化 世代間格差 …

グローバル化のなかで生じてきたこれらの課題に対しては、解決方法もグローバル化していくほかない。人的・経済的資源を自国に投入して解決策を深く探る「タテ型」の対策だけでは不十分。国境や文理や専門や職場の壁を超えた「合わせ技的取組み」という「ヨコ型」の連携が強く求められる時代。

21世紀型教育・知の在り方へのこのような転換が求められる今、社会科学系大学院教育は何をすべきか。

社会科学系大学院をめぐる課題

① グローバル・チャレンジ時代への対応の遅れ

- ・ **タテ型からヨコ型へ**：「モード1」（ノーベル賞級学者をトップとし、国際舞台で活躍する若手科学者の数量的拡大が国のグローバル化をもたらすとする認識）から「モード2」（人類社会に共通する諸問題の解決方法論の「グローバル化」の必要から、文理や国境を超えた「合わせ技的取組み」を前提とする認識）へ
- ・ イノベーションを喚起するラウンドテーブル型・文理共鳴型の知へ
➔ 我が国の社会科学系大学院教育の応答は不十分

② 「非学歴社会での高学歴化」の限界

- ・ 我が国の高等教育の歴史的格 ➔ 資格社会 > 学位社会
- ・ 学位より資格が優秀さを証明（例）高度資格獲得と教育課程中退（旧外務公務員I種試験（外交官試験）、旧司法試験）、新司法試験における予備試験人気、「疑似資格」としての修了大学院歴

③ 「大学院では研究＝教育」という暗黙の共通理解

- ・ 学位プログラムの整備と実践が未達成の従来型の研究者養成大学院
- ・ 大学院は高度アカデミック・トレーニングの場であるという認識の不足
- ・ 専門職学位課程では学位プログラム整備が進行

⑤ 修了生の将来展望と出口対策

- ・ 一橋大学の場合、修士課程の入学定員に対する博士後期課程の入学定員は41%

⑥ 外国人留学生への対応

- ・ 一橋大学の場合、修士課程の留学生比率は約3割、その75%が商学研究科・経済学研究科
- ・ 修了後に日本国内での就職を目指す留学生の増加
- ・ 就職率は、学部生（留学生含む）> 日本人院生 > 留学生院生

21世紀型大学院教育を志向する一橋大学

- GCOE
 - ・ 「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」(経済研究所・経済学研究科)
 - ・ 「日本企業のイノベーション」(商学研究科)
- 四大学連合(東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学、一橋大学)
 - ・ 「大学院学生の教育研究交流に関する協定書」(2005)
- 文理共鳴型グローバルリーダーの育成
 - ・ 東京工業大学「グローバルリーダー教育院」への参画
 - ・ 「道場」を共同実施。一橋大学は「現代会社法」「ベンチャー企業と法」「特許法」「国際法務戦略論」等や「人文社会系道場」に参画。国際企業戦略研究科、経済学研究科等の院生が、東工大の「科学技術系道場」科目を受講
- 科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」
 - ・ 自然科学系知識と人文社会科学系知識が融合する体制
 - ・ イノベーションの現場に対する深い考察と政策立案プロセスの同期
 - ・ 公的部門と民間部門との相互作用

文理共鳴を旨とする
21世紀型大学院教育

課題① 若手研究者のモビリティ向上 → 共著論文の増加へ
課題② キャリア支援 → **キャリア支援室大学院部門**

一橋大学大学院修了者のコンピテンス

一橋大学のミッション

日本で唯一の世界水準の社会科学系研究総合大学として、

1. 充実した研究基盤を確立し、新しい社会科学の探究と創造の精神のもとに、独創性に富む知的、文化的資産を開発、蓄積し、広く公開する。
2. 実務や政策、社会や文化との積極的な連携を通じて、日本及び世界に知的、実践的に貢献する。
3. 豊かな教養と市民的公共性を備えた、構想力ある専門人、理性ある革新者、指導力ある政治経済人を育成する。

(一橋大学研究教育憲章「研究教育の理念」)

その実現のための教育方法として、

- 伝統のゼミナールを大学院でも必修
- 優秀な学部生を対象とした「5年一貫教育プログラム」を、商学研究科・経済学研究科から全研究科に拡大
- 社会連携を重視した体系的な大学院教育を通じ、高度の専門性を身につけるとともに、考え抜く力、書く力の鍛錬に基づく優れた修士論文、博士学位論文の完成を目指す。

大学院におけるゼミナール教育

一橋大学は、高度の社会科学専門教育のみならず、「実学」すなわち実践する知、応用する知を伝統的に重視

学部

- 少人数の3年次ゼミナール及び4年次ゼミナールを通年必修として開講
- ゼミナールでは、教員の指導のもと、「問いを立てる」に始まり、「問いを探る」プロセスを経て「問いを解く」に至るまでの課題探求能力の練磨がグループで進行
- アクティブ・ラーニングと親和性の高い少人数教育

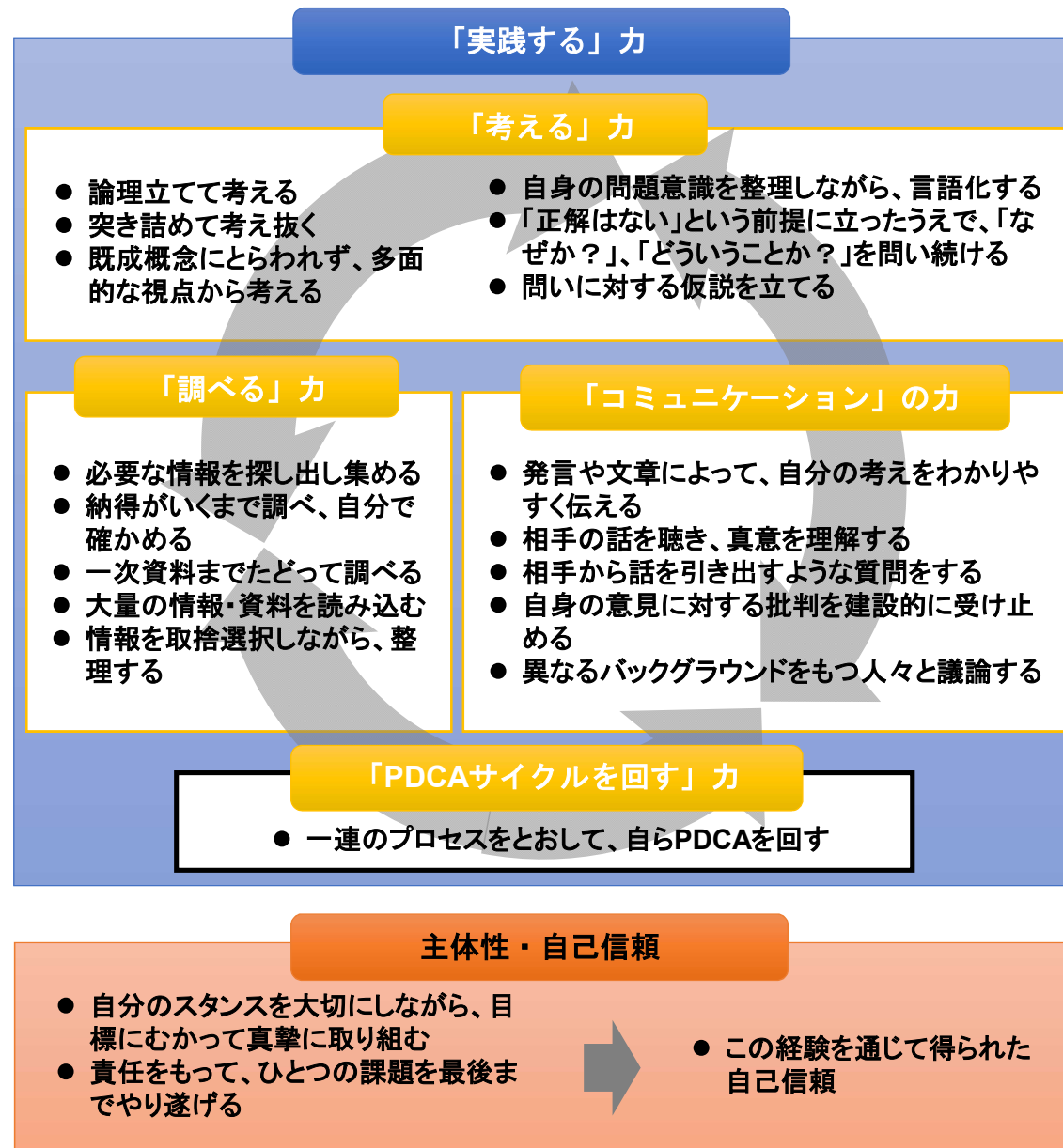
大学院

- 修士課程院生と博士後期課程院生が共同でゼミナールを構成
- 教員の指導のもと、**専門分野や研究実績を異にするゼミナール仲間に対し、いかに自分の研究を分かりやすく伝え、影響を与えるかがゼミナール教育の目標のひとつ**
- 少人数で高密度の討議を行う大学院ゼミナールは、チュートリアルや現地調査、インターンシップ等とともに、一橋大学大学院の有力な教育方法
- 国立大学において可能な少人数教育方法

修士課程教育が培うアカデミック・コンピテンス (一橋大学大学院修了生からの聞き取りに基づく)



一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY



「実践する」力

「考える」力

- 論理立てて考える
- 突き詰めて考え抜く
- 既成概念にとらわれず、多面的な視点から考える
- 自身の問題意識を整理しながら、言語化する
- 「正解はない」という前提に立ったうえで、「なぜか?」、「どういうことか?」を問い続ける
- 問いに対する仮説を立てる

「調べる」力

- 必要な情報を探し出し集める
- 納得がいくまで調べ、自分で確かめる
- 一次資料までたどって調べる
- 大量の情報・資料を読み込む
- 情報を取捨選択しながら、整理する

「コミュニケーション」の力

- 発言や文章によって、自分の考えをわかりやすく伝える
- 相手の話を聴き、真意を理解する
- 相手から話を引き出すような質問をする
- 自身の意見に対する批判を建設的に受け止める
- 異なるバックグラウンドをもつ人々と議論する

「PDCAサイクルを回す」力

- 一連のプロセスをととして、自らPDCAを回す

主体性・自己信頼

- 自分のスタンスを大切にしながら、目標に向かって真摯に取り組む
- 責任をもって、ひとつの課題を最後までやり遂げる
- この経験を通じて得られた自己信頼

新たな動き：大学間でのコンピテンス・サーベイ

平成25年11月 教育改革推進懇話会 (GLU12) にチューニングWG 設置

メンバー12大学がすべて参加（北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学（幹事大学）、早稲田大学、慶應義塾大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）

WGでのこれまでの取組

第1回 平成25年12月16日

- (1) 「チューニングWGにおける検討の方向性」(一橋大学)
- (2) 「チューニングの知見をもつ機関からの説明」(日本学術会議、筑波大学、一橋大学)

第2回 平成26年2月7日

- (1) 「グローバル人材育成と大学の国際化関係施策について」(文部科学省)
- (2) 「汎用的／分野別コンピテンスに関する情報共有」(一橋大学)

第3回 平成26年3月7日

- (1) 「チューニングの準備を進める三大学からの報告」(東北大学、筑波大学、一橋大学)
- (2) 「チューニングに必要なシラバス作成についての情報共有」

第4回 平成26年5月16日

- (1) 「東京工業大学と清華大学のダブル・ディグリープログラム」(東京工業大学)
- (2) 「チューニングに必要な単位互換方法についての情報共有」

第5回 平成26年7月10日

- (1) 「一橋大学国際企業戦略研究科『キャンパスアジア』の経験から」(一橋大学)
- (2) 「今後の共同作業について」

第6回 平成26年10月17日

- (1) György Nováky 教授講演 “Tuning Japan: Being part of a global process” (一橋大学)
- (2) 「コンピテンス調査進捗状況について」
- (3) 「EU Tuning Academyでの研修について」

GLU12コンピテンス・サーベイ (第1次)

- ① 調査内容： 学生・院生、教員、卒業生、企業その他の雇用主を対象に、大学・大学院で養成することが期待される知識や技能(コンピテンス)に関する調査を行う。
 構成： 汎用的コンピテンスに関する質問紙調査(30項目程度の質問)及び分野別コンピテンスに関する質問紙調査(1分野につき20~40程度の質問)
- ② 調査対象： GLU12における学生・院生、教員、卒業生・修了生、企業その他雇用主
 原則として全課程(学士、修士、博士)が対象。分野の特性を考慮することが望ましい。
 調査対象者には留学生を含み、質問は邦文に英文を併記する。
- ③ 調査実施期間： 平成26年度
- ④ 調査方法： 郵送・郵送回収
- ⑤ 経費： 一橋大学(森有礼高等教育国際流動化センター〔平成26年4月設置〕)

分野	参加大学	対象予定者数(人) (学部生、院生、卒業生、教員、企業)
歴史学	東北大、筑波大、早稲田大、一橋大	5411
ビジネス	筑波大、一橋大	1025
化学	東北大、東工大、早稲田大、九州大	8360
物理	北海道大、東北大、東工大、早稲田大、大阪大	8160
機械工学	北海道大、東北大、早稲田大、東工大	9800
土木工学	東北大、早稲田大、東工大	3915

合計 36671

コンピテンス・サーベイに期待される成果

コンピテンス・サーベイから把握が期待される諸点:

- (1) 各大学は分野ごとにどのようなコンピテンスの形成を目指して教育を実践しているのか
 - (2) 学生・院生はそれをどのように捉えているのか
 - (3) その学科・専攻の卒業生・修了生は、職業実践のなかでそれをどのように役立てているのか
 - (4) 大学の教育実践と雇用者の要請の間にはどのような一致と不一致があるのか
-
- これらを広く把握し、今後のわが国の高等教育実践の改善に寄与することが目的。海外の先進的実践に倣い、チューニング実践の準備段階として、教育各分野において卒業時に学生が身に付けることが期待されている能力や技能(コンピテンス)について理解を共有し、そこに各大学がもつミッションやポリシー、教育的特色を反映させてカリキュラムを形成していくことが、各大学の教育的リソースや特徴を活かしつつ分野ごとの教育の質保証を実現するための有力な方法になる。
 - 本調査は大学自らが主体的に実施するもの。大学教育について一定の基準に即した「共通化」や「標準化」を導くものではない。各大学の特色と機能を認識・強化する機会とし、モビリティの向上と各大学の国際競争力強化を同時に実現させる。12大学それぞれが有する海外大学パートナーとのチューニングへと発展的に展開することにより、国際的に高レベルの課程調整が可能となる。その成果をもとにモデルを構築し、日本国内全大学への配信と普及をはかることは、日本の高等教育の国際化に深く貢献する。
 - これまでのWGを通してチューニング実践の協働基盤を形成してきた。それが、GLU12において本調査を行う前提にある。チューニングWG参加大学は、この認識で一致。平成26年度のサーベイ成果に基づき、27年度以降に調査分野の拡大を視野に入れている。

大学院教育の国際比較可能性・等価性、学術的信頼性・通用性

コンピテンス・サーベイの結果を世界のチューニングネットワークと共有・比較検討する。以下のような具体的な成果を想定：

- ① コンピテンスについて、大学(教員)、学生・院生、卒業生・修了生、雇用主の認識における同一性と相違性を確認できる。
- ② それは大学院を含めた大学教育の説明責任を果たすことに資するとともに、社会や経済のニーズを汲み取った教育課程の編成、カリキュラム改善、教育内容の向上をもたらす。
- ③ 個々の大学がそれぞれの強みと特色を確認し、その強化を図ることができる。
- ④ 上記工程をチューニング世界ネットワークと共通の枠組みで行い、他の地域の調査結果と比較検討することにより、対象分野の国際的比較可能性と等価性を高めることができる。
- ⑤ 上記作業の積み重ねにより、教科の相互認証性の確保から学位の相互認証性の向上へと発展し、共同学位や連携学位の学術的信頼性を高めることができる。
- ⑥ 学部・大学院教育の主要分野で習得されるコンピテンスについて、具体的な定義を作成することができる。

- 社会科学系を含む大学院教育についてGLU12が先導的調査を行うことに意義
- 平成26年度中に結果報告

一橋大学大学院修士課程では、学生の約3割が外国人留学生

	学部		修士課程		博士後期課程	
	全体	うち留学生	全体	うち留学生	全体	うち留学生
商	1308	91	246	87	68	10
経	1255	36	163	73	78	16
法	807	27	23	10	59	14
社	1086	35	174	17	248	24
言	—	—	106	26	144	50
合計	4456	189	712	213	597	114
留学生比率	4.2%		29.9%		19.1%	

大学院在學生に占める留学生の割合

